大原一興：スウェーデンの高齢者居住とエコミュージアムにみる北欧社会の生活文化、日本建築学会環境行動研究小委員会主催公開研究会資料集『社会システムと場所の質からよみとく北欧の「ふつう」の生活』所収、日本建築学会環境行動研究小委員会、pp. 19-22、2013. 12. 14

スウェーデンの高齢者居住とエコミュージアムにみる北欧社会の生活文化

大原一興

横浜国立大学、大学院都市イノベーション研究院、教授、工学博士（ohara@ynu.ac.jp）

スウェーデンを中心とした北欧社会における高齢者居住と地域文化について、これまでに大きく関心を持って事例調査などの研究をしてきた。高齢者の居住の場としては、グループリビングという居住形態の意味や意義について多くのことを学ぶことができたし、制度や施設の経年的な変化について定点観測をしていると、そこからは所有と利用との区別を明らかにする必要性を感じてきている。また、持続可能な社会づくりとして、社会教育的な手法による活動が重要である点、また地域住民の文化を継承する生涯学習機能としてのエコミュージアムについては、世界的にも先駆的な事例が多く、日本におけるエコミュージアム展開についての参考として北欧の事例は貴重な事例となっている。

高齢者居住，エコミュージアム，ローカルアジェンダ 21，持続可能性，共生社会

１．北欧をフィールドとして実施した研究の概要

筆者と北欧との関わりは、大学院生時代、生まれてはじめての海外旅行先として訪ねたことにさかのぼる。1984 年、日本の高齢者比率が 10%に満たない時期で、高齢者施設の研究のためにはその先進国を視察して学ぼうという単純な思いからだったが、スウェーデンでは医療施設であったナーシングホームが市町村の管理となる動きに併せていわゆる個室・ユニット化が始まっていた。この時見た実像は 30 年後の現在でも高齢者介護施設の目標となるべき標準像となっている。数日間の視察だったが、この他にも豊富なデザインの福祉機器とバリアフリー化、コレクティブハウジング、高齢者向けサービス付き住宅、街並み保存など、現在日本で話題にあがっているものの素材は出そろっていた。

1997 年、少し長期に滞在する機会を得て、高齢者の住まいを中心に研究を行ったが、この時の主要なテーマは、ルンド大学のオーヴェ・オールンド先生と認知症高齢者グループホームを訪ね歩き評価をおこなうことだった。この時「君は日本人でスウェーデンの認知症グループリビングを一番多く見た人間のはずだ」との言葉に自信を持って、そのとき感じた多様な住空間をレポートにまとめ、帰国後に文－１，２）として紹介した。研究として仮説があったわけではないが、グループリビングは「小さな老人ホームではない」ことの理解が本質的に重要な点であると確信して、この理念を伝えるべく表現をしたつもりである。「自立」ではなく「共立」としての住生活形態の可能性を示すことができたことが訪問したことの成果といえる。このグループリビングという形態が、実は、認知症の人の生活空間としてだけに限らず、介護施設等における標準型として汎用性の高いひとつの住空間形態として将来の方向性のひとつと思われる。文－３）他でもその方向性を指摘した。この後、海外視察先としてスウェーデンを中心として北欧をとりあげ、文－４，５）の報告書で高齢者、障害者の居住の場や福祉施設の実例についてとりあげた。2006 年にもストックホルムに滞在する機会を得たので、これらの経年的な変化を調査することから、社会的情勢の変化により建設当初の制度は数十年経つと役割を変えることが必須であること、これに対応するためには、住宅や施設の建築物についての所有主体にとらわれずに利用の概念から見直すという柔軟な発想の必要性を文－７）で指摘した。

最初に滞在して 1997 年には、折しも各自治体で、ローカルアジェンダ 21 を競って作成しており、スウェーデン全体で持続可能な環境・社会づくりに関心が高い時期だった。エネルギー政策ガイドラインをめぐっての議論やバーシェベック原発の操業停止などが話題となっていた。ルンド市でも市民の参加するワーキンググループが活動しており、その発表会の場に出向くなど、物珍しさも手伝ってその活動について調べていくうちに、ルンド市でのテーマが「情報と学習」であることを知り、持続可能な地域づくりの手法としてこの概念が非常に重要であることを実感した。文－７）でも触れたが、社会教育的な手法が市民主体の自発的な地域づくりに欠かせない。

さらに当時日本に紹介され関心を持っていたエコミュージアムについてもスウェーデンから学べる点が多いことがわかったのも訪問時だった。それまで世界のエコミュージアムに関する文献などを読んできた中から、文－８）では、エコミュージアムが提唱されたフランスにおいて夢と現実との差を大きく感じてしまうのに対して、スウェーデンのベリスラーゲン・エコミュージアムはその実現路線を歩んでいるとの称賛ともとれる文章が気になっていた。実際に訪問してみたところ、実はスウェーデンには複数のエコミュージアムの活動がきわめて活発にかつ健全に根付いていることを知った。文－９）で、ここでは夢から現実に向かってきていることが書かれていることもこの時に知った。さらに、ノルウェーの博物館学のグループによる北欧における精力的な理論と実践の紹介（文－１０）など

の存在を知った。これを機に、スウェーデンのエコミュージアムには、何度も訪ね定点観測をすることになる。この後、文－１１～１４）のように、北欧の他国のエコミュージアムについても調査を重ね、その特徴をまとめた。一番の特徴は、中心をもたずに多活動拠点をつないでいくネットワーク構造にあり、ここで学んだ概念を日本のエコミュージアムの展開に応用した実例地を、世界中のエコミュージアムを研究している英国のピーター・デイビス先生を招聘し見てもらったところ、日本のエコミュージアムは博物館学の民主化（Democratisation）として評価された。これは、そのモデルとしての北欧のエコミュージアム活動が、まさに民主主義に根ざしていることを示している。

2006 年は、高齢者住宅についてその体制のリフォームの時期であったが、エコミュージアムについても、ベリスラーゲン・エコミュージアムがちょうど開設から 20 周年を迎え国際ワークショップが開かれ、当時急速に発展したイタリアなどを中心としてヨーロッパ全域でのネットワーク活動や欧州ランドスケープ条約との連携、国内においても周辺地域との連携など、継続と展開について様々な知見が得られた。

２．現在の研究の継続状況

その後長期に滞在する機会にはめぐまれていないが、引き続き関心は持ち続けている。まず、高齢者施設や住宅については、かつての制度化での施設がどのように転用され時代に即して生き延びているのかに興味があり、事例的にではあるが、機会をみつけてその後の変化について調査をしている。

スウェーデンではかなり以前から、既存の建築物からの改築によって高齢者施設にする整備方法も進められており、写真１はそのような文化財としての保存建物を転用して居住施設に変えているものだが、文化財としての制度による改築への制約があるほか、広い空間をどのように居住空間に適合させるかについての工夫は、創造力を喚起させてくれる事例である。

また、写真２は、かつてサービスハウスという制度が流行していた頃に建てられたものだが、近年のニーズの変化により高齢者の住まいとしての必要性が無くなり、現在は行政のオフィスに改修されているものである。す既存の高齢者住宅の転換のはかりかたも今後日本で想定しなければならない課題のひとつである。

次に、エコミュージアムの研究については、引き続きヨーロッパにおける世代継承性と現代的課題への対

写真１　古い城を改築した認知症高齢者グループホームの室内

写真３　ゴーストタウン化したシェールファレット住宅地

写真２　80 年代のサービスハウスが改修されて現在は社会サービスなど行政のオフィスに転用されている

写真４　住民によって良好に維持管理されているストーラハーゲン住宅地

応に関する研究（文－１６）の中で、とくにスウェーデンに関しては、文化財の保全における現代的課題としての若者の雇用や次世代への継承の問題などが考えられるが、高齢者世代への価値と若い世代の参加の方法などの実例を調査している。事例としては、1890 年代に建設当初ほぼ同じ形態の住宅によって構成されているふたつの住宅地での象徴的な対比をとりあげている。かたや居住者が居なくなり放置されているところ（シェールファレット）と、もう一方で、すでにエコミュージアムのサイトとして、地域の活動団体（その地域の歴史協会）がそのうちの１棟を展示室および組織の事務所として整備している住宅地（ストーラハーゲン）を対象に、そこでの市民の自主的な修復や保全の活動を観察している。このような地域活動の有無によって、住宅地の運命が変わってきていることについて経緯をより把握することや、シェールファレットについては、最近、地域の有志による維持管理活動が開始されてきておりその動向についても継続的に調査していきたいと考えている。

３．北欧諸国をフィールドとして研究することの意義・可能性

まず、高度福祉国家としての長い時期の経験があることで、とくに高齢化に対応した時代の変化とその対応についての評価が定まりつつあるものが多い。経験や時間により研ぎ出された価値を持つ事例として、いまだ手探り段階の日本にとっては参考にすべき事例が数多い。

また、デモクラシーの進んだ政策決定プロセスの経験が豊富である点から、今後、日本でも施設等の整備指標としては仕様規定一辺倒ではなく性能規定化、さらにプロセス規定化の必要性が高まってくる点で参考になろう。とくにエコミュージアムについては、市民活動やコミュニティ形成の手法として共通する点として、中心を持たないネットワークのシステム化の実例は非常に参考になる。

スウェーデン社会の合意形成における社会教育的手法として、かつてのローカルアジェンダ 21 づくりにおける「情報と学習」の保障という視点は今後も活用できる社会形成の方法として有効と思われる。

さらに、実験国家と言われるスウェーデンでは、官民の研究開発の成果を実装すべく、地域やコミュニティをテストベッドにして、つねに戦略的に政策展開を試みていく実験的な活動が実施されることが多い。社会としての合意形成の計画論として学ぶ点は多い。そのもととなる市民の価値観形成の基礎には、職場での作業の協働化、地域や家庭での生活を重視するライフワークバランスが良好に日常化されており、このことが、ローカルコミュニティの醸成に寄与している。

４．北欧研究を経たこれからの研究の展開

スウェーデンの高齢者居住において 2005 年以降語られることの多いキーワードのひとつが「安心」というような概念を付加した住居である。サービス付きというのではなく、安心感を提供するという言葉だが、それは高齢者にとっては「不安のない」という概念のではないかと考えている。安全・安心であることは前提で、さらに将来に不安を感じない時間的概念を含むものとして考えると良いのではないだろうか。この「不安のない」概念の明確化とそのための条件を構成することが現代の研究の課題である。

また、グローバリゼーションの進行する中、人々が地域社会において自分のアイデンティティを保持することができるためには、社会として多文化の共生、異文化を尊重し許容し、共生することが重要と思われる。エコミュージアムの実践において、とくに都市において、文－１７，１８）で指摘されているのが、とりわけ多文化を認め合い、各人がコミュニティの一員として共生社会をつくっていくことの重要性である。ヨーテボリ博物館のエコミュージアムプロジェクトはまさに移民の人々により生かされている多様な文化を「聴く」ことに始まっている。

写真５は、世界の中でも北欧社会で市民権を得ている度合いの高いLGBT の人々のパレードが毎年盛大に行われているが、その際に、若い人々のもたらす新たな文化に対して、顔をしかめたり違和感をあからさまに示す高齢者の人々の姿が見られる。高齢社会の特徴であり大きな課題は、まさにこれらの世代間が軋轢なくスムーズに共生していくことであろう。LGBT の人々の多様な価値観を、それぞれの独自文化、個性として尊重し認め合っていくことは、多文化共生そして全員参加という社会の目標にとって欠かせないことであると言えよう。これらを努力し追い求める北欧社会の姿は、障がいを個性として捉えてきた長い歴史に裏打ちされた、共生の姿勢として実感できる。

写真５　LGBT の集う PRIDE パレードの日の新聞記事（2006 年８月５日）見慣れない文化をもつ若者への違和感を示す高齢者

５．日本・北欧へのフィードバック対象・方法

これからの日本の施設づくり、社会づくりへのヒントとして参照すべき事例は北欧には多くある。もちろん、文脈を無視して形だけを真似するような愚かなことはしてはならないが、民主主義としてのプロセスやそのシステムを学ぶべき点は多い。とくに、社会心理は一度経験することによって次の段階に変化することもある。高齢社会との対応においては、長期にわたって制度的な対応を試みてきた経験から学ぶことが必要であろう。

最後に、本研究会の課題としての「ふつうの生活」については、これまでに日本の福祉施設における目標像としての「ふつうの生活」についての実像を探るべく、施設の職員の感じるイメージの写真を収集して分析をおこなったことがある。北欧においても通常のふつうの生活が目標として掲げられるが、多くの場合それは実際には「施設的ではない」ことを意味している。文－１９，２０）における日本での調査結果から、「ふつうの生活」は一意に決まるものではない。それは自分のしたいことを気兼ねなくできる「家庭らしさ」や「自分らしい」生活と通じる概念であり、むしろ、自分らしい個別性の保障という点がより重要な点であることがこれまでのところの結論である。ふつうの生活を求めることは、「生活の自己決定」とほぼ同義に捉えられるものだと言えよう。この点においても、多様な価値観や生活観の尊重にもとづく「多文化の共生」がキイ概念となる。

参考文献

文－１）大原一興・オーヴェ・オールンド：*痴呆性高齢者の住まいのかたち*、ワールドプランニング、2000.10

文－２）Owe Åhlund and Kazuoki Ohara: *The Physical Environment of Group Living for people with Dementia -12 Case Studies in Southern Sweden-*、World Planning、Tokyo、2000.11

文－３）大原一興：スウェーデンにおける痴呆性高齢者ケアとグループリビング、日本痴呆ケア学会誌、第３巻１号、pp.71-76、2004.3

文－４）JIHA ツアー報告書、*北欧における福祉文化*、日本医療福祉建築協会、2000.2

文－５）*北欧高齢者住宅視察報告書*、（財）高齢者住宅財団　2003.8

文－６）大原一興：高齢者の住まいづくりに見る「利用」の諸相、2010 年度日本建築学会大会建築計画部門研究協議会資料*『「利用」の時代の建築学へ－建築計画にとって何が課題になり得るか？』*所収、日本建築学会建築計画委員会、pp.11-14、2010.9

文－７）大原一興：ルンド・コミューンにおけるローカルアジェンダへの取り組みースウェーデンにおける環境政策最新事情－、環境自治体会議ブックレット*『LOCAL AGENDA 21 IN JAPAN』*、pp.70-79、環境自治体会議、2000.6

文－８）Hudson, Kenneth. 1992. The Dream and the Reality. 20 years of ecomuseums and ecomuseology. *Museums Journal*, April 1992,　pp. 27-31.

文－９）Hudson, Kenneth. 1996. Ecomuseums become more Realistic, pp.11-19,*Nordisk Museologi*, 1996.6

文－１０）Gjestrum, John Aage and Maure, Marc (ed.) : 1988, *Økomuseumsboka - identitet, økologi, deltakelse*, Norsk ICOM

文－１１）大原一興：*エコミュージアムへの旅*、鹿島出版会、1999.12

文－１２）*北欧における農業を活かしたエコミュージアム調査報告書*、平成 11、12、13 年度、農村環境技術研究 No.46、62、63、（社）農村環境整備センター、2000.3、2001.3、2002.3

文－１３）大原一興：2000. エコロジーとエコミュージアムの島　サムソー島、pp.69-76、no.18、*ビオシティ*、2000.6

文－１４）Kazuoki Ohara : 2008. What have we learnt and should we learn from the Scandinavian Ecomuseums? -A study on museological way to make sustainable community-, pp.43-51, *Journal of Japan Ecomuseological Society*, No.13, 2008.3

文－１５）Davis, Peter. 2004. 'Ecomuseums and the Democratisation of Japanese Museology', *International Journal of Heritage Studies* Vol. 10, No. 1, pp.93-110,.

文－１６）大原一興（代表）：文部省科学研究費補助事業報告書 No.22601003　基盤研究(C)一般（2010～12 年度）*欧州エコミュージアムにみる世代継承性と現代的課題への対応*、2013.5

文－１７）Bellaigue, Mathilde: 1992. "Local identity in the process of globalisation - the ecomuseum questioned <finding the signs of a world rematerialisation＞", *Nordisk Museologi*, 1999.2 , pp.55-64

文－１８）Sjölin, Mats. 2004. *De Många Kulturernas Betydelse*, Lindelöws bokförlag

文－１９）大原一興, 佐藤哲、安藤孝敏、藤岡泰寛、2010、福祉施設における「ふつうの暮らし」の環境的条件に関する研究－居住施設空間における住宅らしさ・家庭的環境の実像について－、*住宅総合研究財団論文報告集*、vol.36、p.247-258、2010.3

文－２０）Kazuoki Ohara; 2010. “Ordinary life” in Nursing homes and group livings - The home-like image and real image of domestic circumstances in housing for the elderly -, WG15, ENHR conference *"Housing in an expanding Europe: theory, policy, participation and implementation"*, Istanbul 4-6 July 2010